

SEMINAR HOUSE NEWS

セミナー・ハウス'88冬

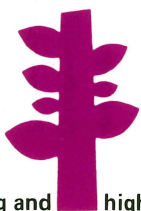
= 第24回大学教員懇談会 =

●大学の魅力開発

= 第14回国際学生セミナー =

●〈開かれた〉日本・総点検

——君はJapan Problemをどう考えるか——



Plain living and high thinking

No.109

ユニバーシティ・アイデンティティの確立のために

名古屋大学教育学部長 潮木 守一

②

最近、ユニバーシティ・アイデンティティということが、話題になっていきます。一人ひとりの人間が人間らしさを作り上げなければならぬのとちょうど同じように、それぞれの大学もその大学にふさわしい個性を持たなければならぬ、ということなのです。

しかしそれは逆に言えば、大学がいかにも個性に乏しいか、あるいは個性を発揮しようとしてもそれがいかに難しい状況にあるか、ということをお話しているのではないのでしょうか。大学はどうすれば自分の顔を持つことができるようになるのでしょうか。

U-Iの登場

まずは、大学が置かれている状況を整理してみましょう。一頃の大学紹介に比べれば、確かに大学の中身を知らせるようになってはきましたが、基本的には以前とあまり変わりは見えません。以前とあまり変わりは見えません。

多くの受験生は、各大学、各学部の入試難易度や就職状況の情報によって大学を評価しているだけで、入学後の四年間はブラック・ボックスの状態です。しかも、世間では、大学四年間は何もしない方がよいか、たっぷり遊ばせて受験競争で歪んだ人間性を回復させてやるのが大学の役割だ、というような論評まで流れていたりします。

大学評価そのものは、最近になってはじめて出てきたというわけではありません。企業経営においてC-I (Corporate Identity) ということがさかんにいわれ出すなかで、大学も企業のように目標と結果をきちんと評価しな

ければならないのではないかと、という考えからにわかに登場してきました。つまりこれからは、大学四年間で学生が何を学ぶのか、教師は学生に何を与えるのか、という大学教育の質が問題にされるようになってきます。

大学評価の諸類型

そこで、各国では大学評価がどのように行なわれているか、ということをお簡単にみてみたいと思います。

アメリカには、日本のような固まった大学の設置基準というものがありませんので、容易に大学を作ることができます。しかし、学位を出すためには、各地域にあるアクセレディテーションの資格認定をする協会で審査を受けなければいけませんので、大学の質はそこで評価されます。この審査は、新しい大学だけではなく、古い大学でも一〇年おきに相互に評価を行なうことになっていますので、例えば、歴史のある南カリフォルニア大学でもちよほど一〇年目にあたるというわけで、約三〇〇頁におよぶ膨大な自己評価の報告書を作成して、Western Association of Schools and Collegesへ提出しています。政府に大学の評価を任せたらいろいろ問題が出てきますので、自分たちで連合体を作って、自分たちで評価し合い、水準を維持したり向上に努めようという方式で、いわばアメリカ的民主主義の上に成り立っているものといえるでしょう。

フランスでは、数年前から学界八名、経済界四名、会計検査院一名、国家評議員一名、

委員長一名の計一五名から構成されている「大学評価委員会」という機関を作りました。国家財政の乏しいなかで、いままでのように学生数、教員数に応じて予算を配分することができなくなっています。そこで各大学を評価して、その成績に応じた予算配分を行なおうというわけですが、いまのところ評価結果をどのように使うかは明らかではありません。

イギリスでは、これまで政府の圧力が直接大学に及ぶことを避け、両者の間にあって調整する緩衝機関として「大学補助金委員会」(略称UGC)が設けられておりました。ところが最近では国家財政が逼迫したため、大学予算が一律二%カットされ、さらにUGCが各大学の学部あるいは学科三七分野について研究成果を評価し、それに応じて、傾斜配分を行なうような事態が現われてきております。

西ドイツでは、数年前から高等教育基本法が改正され、連邦の文部大臣が盛んに大学間の競争を主張していますが、大学評価はいま始まったばかりです。一つの例としては、ギーゼGiese教授が学位所有率、教授資格所有率、ドイツ研究審議会委員率、フンボルト奨学生率、教授招聘のバランス、転出率、留任率、招聘受諾率、第三者からの研究資金受け入れ率などによって大学評価を試み、ランキング表を発表しています。しかし、ここでもこうした大学評価の結果に応じて予算の傾斜配分を行なうというところまでには至っていないようです。

以上の通り、大学評価にはさまざまな類型



が考えられますが、大学評価を実際に行なうさいに一体どういう問題点があるのでしょうか。

大学評価の難しさ

アメリカでは大学教育の水準を維持、向上させるために相互に評価し合うというかなり長い伝統を持っていますが、フランス、イギリス、西ドイツ、日本にはそういう経験がありません。

どこの国にも共通していえることですが、研究成果の評価はある程度まではできて、教育の評価は困難であるということです。研究と教育が統一された形こそ本来の理想的な大学であるといわれていますが、この両者は水と油の関係になりがちです。例えば、研究は評価するが、教育は評価しないということにでもなれば、多くの教師は研究に命をかけて教育の方はほどほどにということになりかねません。

ところが、研究成果の評価はしやすいといいましたが、これにもいくつかの問題があります。例えば、一年間に論文を何本書いたか、本を何冊出したかということは数えられるとしても、本と研究論文を同じウェイトで計算していいはずはないし、あるいは同じジャーナルといっても、学界にとって重要なジャーナルとそうではないものもあります。また、学問領域によっては、いくらでも出版する機会がある領域もあれば、刊行物として出たばかりでも出してくれるところがないという領域もあります。さらに、研究者にもタイプがあっ

て、多産型もいれば少産型もいるし、機関誌のごとく研究成果を発表する者もいれば、何十年に一本、珠玉のような論文を書く人もいますので、研究成果の量を測ることも難しいといえましょう。

それでは量だけではなく、質を加味してはどうかということもいわれます。例えば、他人からどのくらい引用されたか、あるいはどのくらい長い間引用されてきたか、というサイテーション・アナリシスというものもありますが、実際に行なってみると、数人の研究者が相互にカルテルを結んでお互いに引用し合い、被引用率が高くなるという「カルテル現象」がみられるというようなこともあるようです。そういうわけで、研究成果の評価といってもなかなか一元的にはいきません。

それでは、教育の評価はどうでしょうか。大学が魅力を開発していくためには、やはりティーチングが活性化していなければ意味がありません。実際に、教育が優れているかどうかを一番よく知っているのは、当事者である学生ですから、学生による評価を取り入れることも必要ではないでしょうか。アメリカで行なわれているような学生による教師の評価は、日本では危険視されがちですが、実際のアンケートを見ると、教師のアラを探すようなことではありませんし、むしろ教師にとってよい反省材料になります。

さらに、一方では、よい講義をしたと評価された教師を表彰するなどの制度を設けることによって、教育に対する動機づけをすることも必要ではないでしょうか。

評価主体の多元化

次に、大学評価全体に関わる問題として注意しておきたいのは、評価主体をどうするかということですが、アメリカでは、すでに述べたようにさまざまな評価機関があつて評価主体が多元化されていますが、ヨーロッパでは、政府とか中央の権威ある機関が一元的な評価を行なおうという傾向にあるようです。しかし大学評価というのは、所詮一筋縄では行かないものですから、評価主体を多元化しておいて、評価される方でも、逆にその大学評価を評価できるようにしておく方がよいのではないのでしょうか。

どういう形で大学評価を行なっていけばいいのか、ということがこれからはどうしても問題になってこざるをえませんが、大学評価の本来の目的は、評価すること自体にあるのではなく、その評価によって自己向上意欲とか、向上のための動機づけを引き出すことであることを忘れないようにしたいものです。評価そのものが一人歩きますと、大学入試における偏差値と同じことになってしましますので、将来、大学評価が問題になつたら、なぜ、大学評価を行なわなければならないのか、その本来の目的をその都度考えるようにしたいものです。
(文責・編集者)

* * *

第24回 大学教員 懇談会

大学の魅力開発

|| 主題 ||

▼講演

ユニバーシティ・アイデンティティの確立のために

名古屋大学教育学部長 潮木守一氏

▼パネル

A ファカルティ・ディベロップメント

—— 大学教員評価の視点 ——

国際基督教大学教養学部長

絹川正吉氏

B 理工系教育の事例—私の場合—

早稲田大学理工学部教授

示村悦二郎氏

C 大学の教授法—その理論と実際—

玉川大学教育学部助教授 高橋靖直氏

▼運営委員

委員長・早稲田大学理工学部教授

示村悦二郎氏

明治学院大学文学部教授 神保信一氏

立教大学学生相談所カウンセラー

平木典子氏

東京工業大学工学部助教授

原科幸彦氏

▼参加者49名28校

(運営委員・講師を含む)

早稲田(4)、電気通信・中央・東京理

科(各3)、千葉・東京外国語・東京工

業・大妻女子・工学院・国際基督教・東

海・東京女子・法政・武蔵工業・明治学

院・上武(各2)、筑波・東京医科歯科・

お茶の水女子・東京・名古屋・東京都

立・駒沢・芝浦工業・日本女子・立教・

玉川・産業能率短期(各1)

◇

今春の国立大学の入学試験日の変更

は、大学、高等学校はもとより社会全般

に大きな波紋を投げかけたが、そこで明

期	日
'87.10.3	~4

らかなったことは、現在の大学がいかに個性に乏しいかということであった。

大学を取り巻く状況は決してバラ色ではない。この時期にあつて、なお個性あふ

れる大学づくりへの努力を怠るならば、それは自ら大学の存在理由を否定するこ

とにつながるかねない。受験生が大学を

選ぶ時代にあつて、受験生を引き付ける

魅力は何か。大学の個性を確立するため

には何をなすべきか。「大学の魅力開発

をテーマにさまざまな視点から活発な議

論が展開された。

大学入試難易度や就職状況による大学のランキングは、必ずしも大学の教育内容を示すものではない。大学を序列化し、学歴社会の虚像を作ることあつても、

大学教育の中身の改善や魅力的な大学をつくるための動機づけにはならない。大

学はいったいどうすれば、魅力ある大学、

個性のある大学を作ることができるのだら

うか。潮木氏は、多様な評価基準と多元

的な評価主体のもとに、大学評価を行な

うことによつて、大学の「自己向上意欲

とか、向上のための動機づけを引き出す

こと」がまず必要ではないか、と講演

された(詳細はフロント・ページ参照)。

パネルでは、絹川・示村・高橋の三氏

から大学の魅力開発の処方箋に関する問

題提起があつた。

まず、絹川氏は新しい教員評価の視点

について発題。マスエリートの育成が社

会的に要請されているにもかかわらず、

今の大学は形骸化した旧態依然たる研究

中心の教授団支配のなかに安住し、知的

な領域にかかわる人間の本質的な営みに

学生を導入させることに失敗している。

このように、大学の存在そのものが無意

味化しつつある深刻な状況のなかで、問

題を「教員個人に還元したり、間にクッ

ションを置いて対応するのではなく、教

授団として行政を巻き込むかたちで立ち

向っていくべきではないか」。その際に、

これまでのような「研究業績中心の評価

システム」ではなく、大学の本質、すな

わち教育機能に即した「新たな教員評価

の視点を考えていくことが重要である、

と。

次に示村氏からは、「自身の「システ

ム解析」の講義を事例にしながら、テキ

ストの利用法、レポートの活用法、授業

の実際、試験の評価法など多くの貴重な

教授法の実践が示された。

最後に、高橋氏は大学教授法の意義と

実際について発題。最近ようやく、大学

にも「教授法」が必要であるということ

が認識されるようになってきたが、それ

は「教室内での、ある科目についての教

え方」というような狭い捉え方ではなく、

「寮生活など生活環境全体の中で考えて

いくことが大事だ」と語る。また、教授

法の「研究」によつて、すべての学問に

通用する一般の原理が見出されるわけ

はないので、教員は「自分の専門を研究

するような気持で、自分の授業を研究対

象として考えていくことだ」と高橋氏は

主張された。

時代と共に大学の使命が変化するなか

で、大学はこれまでのように教育面を第

二として済ませておくことはもはやでき

なくなつた。人格形成期にある青年に対

して、大学の四年間でどういう教育を与

えるのかということについて、「単なる

リップ・サービスではなく、学長、学部

長、学科主任のレベルで一貫した姿勢を

持つこと」(高橋氏)が要請されている。

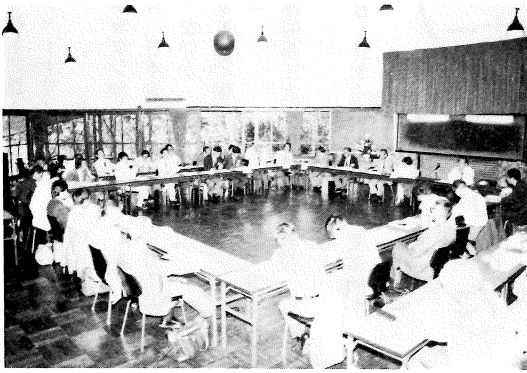
パネルの後、潮木、絹川、高橋の三氏

をそれぞれ中心にした三つの分科会に分

かれて引き続き活発な議論が行なわれた。

最終日は、神保・平木の両運営委員の司会によって、各分科会の報告を踏まえての総括討論が行なわれた。

「今の学歴社会のなかで、受験生は本当に大学の身を問題にしているのだろうか」「教員評価以前の採用人事に問題があるのではないか」「教員よりも学生によって作り出される個性の方が主体であり、しかも大きいのではないか」「人類の危機の時代にあつて、今の大学に必要なことは、問題解決能力と意欲をもつた人材を育てることではないか」など様々な意見がだされた。また、今回の懇



最終日の総括討論



談会では、制度的問題を意図的に避けたが、実際には「今の大学は、設置基準によって雁字搦になつて一方、設置基準によって、ある均衡が保たれているといわれている。だから、もしこれを取り払われるようなことになれば、大学内部で熾烈な生々しい闘争が始まるだろう。だが、この闘争を通らないといノベーションはできないかもしれない」(潮木氏)との指摘もあった。

大学の魅力開発が眉の課題であるという点では、共通の理解が得られるが、問題の設定とアプローチの仕方については、多様な考え方が併存したままであるということが、討論の過程で明らかになった。

大学にとって、個性の発見は容易ではないし、「魅力を出すための万能薬はない」(潮木氏)だろう。しかし、いまや「世界から日本の大学のあり方が問われている」(高橋氏)であり、具体的に「行政戦略」(絹川氏)を立てて、実践していくことが求められているといえよう。

最後に、「このように大学の魅力開発の問題には、多様なアプローチが可能であり、今回は問題の所在を確認する序論にあたるものであつたので、今後とも継続的に考えていくべきテーマではないか」という示村運営委員長の言葉で懇談会は締め括られた。

なお、詳細は企画室編集の『第24回大学教員懇談会記録』(四月末刊行予定、実費頒布)をご覧ください。

懇談会に参加して

教員に必要な問題意識の共有

東京外国語大学外国語学部教授 新田 實

私にとつては今回が「懇談会」への二度目の参加でしたが、前回同様、いや前回以上に有益だったと思います。高等教育全体に係る問題や個別的な問題について、飾られた文章ではなく識者の肉声を通して説明、分析、提案などに接し、自分も考えそして意見を言える貴重な場を、この懇談会は提供して下さっていると思います。潮木先生の講演もパネルでの各報告も大変興味深く、内容のあるものでした。ただ、分科会では、各大学の現状紹介的な部分が多過ぎて、一般化し得る問題点についての討議が十分深まらなかつたように思えました。

大学の教員必ずしも大学問題の専門家ではないばかりか、単に学内行政に関わることではなく、自分の大学のみならず広く日本の高等教育機関における教育・研究の状況の改善について考える姿勢を持つ「大学人」が多数いるとは言えないと思われ、こうした懇談会がもっと回数多く開かれ、常連的な参加ではなく、より多くの教員が参加して問題意識が共有されるようになるとよいのではないのでしょうか。報告者の一人の方の「懇談会の場では展望が明るく感じられるのに、大学に戻ると暗い現状に直面する」と言った主旨の発言は、問題関心の存在が普遍的でない現状を指摘されたものではないでしょうか。

それにしても、既に前回参加したときの懇談会で、文部省の責任ある地位の方が「設置基準の弾力化・大綱化」について言明されていたのに、数年を経た今もまだ同じことが論じられている状況には失望を感じています。大学が個性化し、各々の魅力を持ち、高等教育が全体として活力を持ち、教育・研究の水

準が向上して行くためには、制度上の障害の除去が第一の条件だと考えるからです。

歴史的な分岐点にある日本の大学

玉川大学教育学部助教授 高橋 靖直

多くの大学の先生方のご意見を聴きながら、日本の大学が歴史的な分岐点にさしかつてきているという感を強くしました。大学をとりまく変動の波は、六〇年代後半のそれを政治的と表現するならば、現在のそれは、経済的、文化的、そして国際的なものと考えることができるよう思われます。

嵐が通り過ぎるのをじっと我慢して凌ぐようなわけにもいかず、ほとんどの大学が何等かの対応をとらざるをえないと感じ取っているように思われますが、これまで経験したことだけに難しい課題だと思います。大学という組織の一員であると共に、大学教育に強い関心を持っているものとして、今回の懇談会に参加させていただいたことを学び啓発されることが多くありました。

大学の問題やその在り方を語るとき、いつもおおい知らされることは、色々な意味での多様性です。個々の大学の歴史、規模、組織等、大学を構成する基本的条件が余りに違うだけでなく、高等教育が大衆化するなかで、大学の社会機能や教育機能の考え方も違いが認められます。懇談会での情報交換や意見交換では、そのような多様性を改めて強く感じました。そして、改革、改善のより具体的な方策を考えた場合は、学部構成、学生数等、なるべく類似の大学の者が小さいグループで話しあうことができれば、より噛みあつた話ができるのではないかと思います。

大学教育の改善は、何よりも「学生のために教育があるの」であつて、教師や大学のために学生がいるのではない」という原点に立つことから始まるのではないかと思います。小学校や中学校では当たり前ですが大学ではそうでないところに最大の問題があるように思われます。

第14回 国際学生 セミナー

「開かれた」日本・総点検

君は Japan Problem

をどう考えるか

＝ 主題 ＝

期 日
87. 11. 6 ~ 8

▼ゲスト講演

日本問題―政策決定の主体はだれか―

ジャーナリスト

カレル・V・ウォルフレン氏

▼セクション演習

A 日本企業の海外進出の仕方に問題はないか

丸紅(株)

国際経済研究室長

井上宗迪氏

韓国西江大学校経済学部教授

キム・クァワン・ドゥー氏

B 日本市場ははたして閉鎖的か

ジョン・B・ウエルフィールド氏

▼運営委員

委員長・東京大学教養学部教授

渡辺昭夫氏

一橋大学経済学部教授

東京大学工学部教授

埼玉大学教養学部教授

独協大学外国語学部講師

ユニセフ駐日代表部副代表

▼参加学生71名(内女子18名)

①国籍別(計12カ国)――日本(54)、中

国(4)、アメリカ、韓国、フィリピン(各

家と考えたり、資本主義的な自由市場経済を信奉する国と思ってはならない。過酷で絶え間ない外国からの圧力で変化を強要されない限り、基本的な政策転換は起こり得ない。言葉だけの脅しや国際的通商立法も、日本に対しては十分な効果はない。今こそアメリカは日本の現実を見据え、もっと強い行動を取るべきである。以上は、米国きつての外交専門誌『フォーリン・アフェアーズ』に掲載され、日本でも大きな反響と激しい論争を呼び起こしたオランダ人ジャーナリスト、K・V・ウォルフレン氏の論文「日本問題」(The Japan Problem)の主旨である。

にしたら解決できるのだろうか。

今回のセミナーは、昨年から始められた「開かれた」日本・総点検」を総合テーマとするシリーズの二回目にあたる。今回は特に、冒頭に掲げた「日本問題」論争の火付け役となったウォルフレン氏自身をゲストとしてお招きする幸運を得、外国人の眼に映じた日本のイメージを通して、「自分たち自身を捉え直すよい機会」を与えられた。応募者は、110名近くにも達し、ホットな話題に対する学生感覚の鋭敏さが示される結果となったが、宿舎の収容人員の制限とセミナーの適正な運営を図るため、最終的には参加者を80名程度に絞り込まざるを得なかった。また、昨今の円高状況に鑑み、一定数の留学生をコンスタントに確保することを目的に、今回から新たに「派遣留学生制度」が設けられた。これは、指導教官に推薦していただいた留学生については、参加経費の全額を当法人が補助するものであり、初年度に当たる今回は、アジアからの留学生を中心に10人の留学生がこの制度により参加する運びとなった。重要かつ極めてタイムリーなセミナー実現のために種々ご尽力下さった渡辺昭夫氏を初めとする運営委員諸氏、終始熱心な指導を惜しまれなかった各講師、また特にゲストのウォルフレン氏をお呼びするに当たり、お骨折りいただいた国際プログラム委員宇佐美滋氏に対し、この場を借りて改めて深い感謝の意

―コメをめぐる―

千葉大学法経学部教授

唯是康彦氏

東京工業大学工学部助教

草野 厚氏

C 日本の労働市場は外国人に開かれているか

京都大学経済研究所教授

小池和男氏

(株)神戸製鋼所人事部派遣人事室長

山野上素充氏

D 軍国主義復活の兆しはあるのか

―日本防衛政策の諸問題―

青山学院大学国際政治経済学部教授

阪中友久氏

国際大学院国際関係学研究所教授

「日本をほかの国と同じような主権国

2)、オーストラリア、ベトナム、マレーシア、スイス、タイ、台湾、スウェーデン(各1)。

②大学別(計24校)――東京・早稲田(各9)、独協(6)、青山学院・東京外国語(各4)、筑波・一橋・中央・津田塾・明治・明治学院(各3)、東京工業・ICU・日本女子(各2)、東北・千葉・お茶の水女子・横浜市立・神奈川・東海上智・東京理科・日本・和光(各1)、その他(5)。

参加者の一人はセミナーへの応募理由の中で、「日本がどんどん孤立してゆくように、将来に大きな危機感を覚える」と述べているが、確かに日本は今、国際社会において重大な試練の時にあるという認識が広まりつつある。日米経済摩擦は一向に好転の兆しを見せず、最近では日本が世界経済混乱の根本原因であるとの論調も目立って増えてきているという。「日本の友達は一切どこにいるのか」との発言に示されているように、この対日批判のうねりは決して欧米諸国からのものだけではないことも重要である。「日本は、本当に世界にとっての問題児なのか」、もし問題があるとすれば、「日本社会のどこが、どのような意味で問題とされるのか」、また「その問題はどのような

今回のセミナーは、昨年から始められた「開かれた」日本・総点検」を総合テーマとするシリーズの二回目にあたる。今回は特に、冒頭に掲げた「日本問題」論争の火付け役となったウォルフレン氏自身をゲストとしてお招きする幸運を得、外国人の眼に映じた日本のイメージを通して、「自分たち自身を捉え直すよい機会」を与えられた。応募者は、110名近くにも達し、ホットな話題に対する学生感覚の鋭敏さが示される結果となったが、宿舎の収容人員の制限とセミナーの適正な運営を図るため、最終的には参加者を80名程度に絞り込まざるを得なかった。また、昨今の円高状況に鑑み、一定数の留学生をコンスタントに確保することを目的に、今回から新たに「派遣留学生制度」が設けられた。これは、指導教官に推薦していただいた留学生については、参加経費の全額を当法人が補助するものであり、初年度に当たる今回は、アジアからの留学生を中心に10人の留学生がこの制度により参加する運びとなった。重要かつ極めてタイムリーなセミナー実現のために種々ご尽力下さった渡辺昭夫氏を初めとする運営委員諸氏、終始熱心な指導を惜しまれなかった各講師、また特にゲストのウォルフレン氏をお呼びするに当たり、お骨折りいただいた国際プログラム委員宇佐美滋氏に対し、この場を借りて改めて深い感謝の意

今回のセミナーは、昨年から始められた「開かれた」日本・総点検」を総合テーマとするシリーズの二回目にあたる。今回は特に、冒頭に掲げた「日本問題」論争の火付け役となったウォルフレン氏自身をゲストとしてお招きする幸運を得、外国人の眼に映じた日本のイメージを通して、「自分たち自身を捉え直すよい機会」を与えられた。応募者は、110名近くにも達し、ホットな話題に対する学生感覚の鋭敏さが示される結果となったが、宿舎の収容人員の制限とセミナーの適正な運営を図るため、最終的には参加者を80名程度に絞り込まざるを得なかった。また、昨今の円高状況に鑑み、一定数の留学生をコンスタントに確保することを目的に、今回から新たに「派遣留学生制度」が設けられた。これは、指導教官に推薦していただいた留学生については、参加経費の全額を当法人が補助するものであり、初年度に当たる今回は、アジアからの留学生を中心に10人の留学生がこの制度により参加する運びとなった。重要かつ極めてタイムリーなセミナー実現のために種々ご尽力下さった渡辺昭夫氏を初めとする運営委員諸氏、終始熱心な指導を惜しまれなかった各講師、また特にゲストのウォルフレン氏をお呼びするに当たり、お骨折りいただいた国際プログラム委員宇佐美滋氏に対し、この場を借りて改めて深い感謝の意

今回のセミナーは、昨年から始められた「開かれた」日本・総点検」を総合テーマとするシリーズの二回目にあたる。今回は特に、冒頭に掲げた「日本問題」論争の火付け役となったウォルフレン氏自身をゲストとしてお招きする幸運を得、外国人の眼に映じた日本のイメージを通して、「自分たち自身を捉え直すよい機会」を与えられた。応募者は、110名近くにも達し、ホットな話題に対する学生感覚の鋭敏さが示される結果となったが、宿舎の収容人員の制限とセミナーの適正な運営を図るため、最終的には参加者を80名程度に絞り込まざるを得なかった。また、昨今の円高状況に鑑み、一定数の留学生をコンスタントに確保することを目的に、今回から新たに「派遣留学生制度」が設けられた。これは、指導教官に推薦していただいた留学生については、参加経費の全額を当法人が補助するものであり、初年度に当たる今回は、アジアからの留学生を中心に10人の留学生がこの制度により参加する運びとなった。重要かつ極めてタイムリーなセミナー実現のために種々ご尽力下さった渡辺昭夫氏を初めとする運営委員諸氏、終始熱心な指導を惜しまれなかった各講師、また特にゲストのウォルフレン氏をお呼びするに当たり、お骨折りいただいた国際プログラム委員宇佐美滋氏に対し、この場を借りて改めて深い感謝の意

今回のセミナーは、昨年から始められた「開かれた」日本・総点検」を総合テーマとするシリーズの二回目にあたる。今回は特に、冒頭に掲げた「日本問題」論争の火付け役となったウォルフレン氏自身をゲストとしてお招きする幸運を得、外国人の眼に映じた日本のイメージを通して、「自分たち自身を捉え直すよい機会」を与えられた。応募者は、110名近くにも達し、ホットな話題に対する学生感覚の鋭敏さが示される結果となったが、宿舎の収容人員の制限とセミナーの適正な運営を図るため、最終的には参加者を80名程度に絞り込まざるを得なかった。また、昨今の円高状況に鑑み、一定数の留学生をコンスタントに確保することを目的に、今回から新たに「派遣留学生制度」が設けられた。これは、指導教官に推薦していただいた留学生については、参加経費の全額を当法人が補助するものであり、初年度に当たる今回は、アジアからの留学生を中心に10人の留学生がこの制度により参加する運びとなった。重要かつ極めてタイムリーなセミナー実現のために種々ご尽力下さった渡辺昭夫氏を初めとする運営委員諸氏、終始熱心な指導を惜しまれなかった各講師、また特にゲストのウォルフレン氏をお呼びするに当たり、お骨折りいただいた国際プログラム委員宇佐美滋氏に対し、この場を借りて改めて深い感謝の意

今回のセミナーは、昨年から始められた「開かれた」日本・総点検」を総合テーマとするシリーズの二回目にあたる。今回は特に、冒頭に掲げた「日本問題」論争の火付け役となったウォルフレン氏自身をゲストとしてお招きする幸運を得、外国人の眼に映じた日本のイメージを通して、「自分たち自身を捉え直すよい機会」を与えられた。応募者は、110名近くにも達し、ホットな話題に対する学生感覚の鋭敏さが示される結果となったが、宿舎の収容人員の制限とセミナーの適正な運営を図るため、最終的には参加者を80名程度に絞り込まざるを得なかった。また、昨今の円高状況に鑑み、一定数の留学生をコンスタントに確保することを目的に、今回から新たに「派遣留学生制度」が設けられた。これは、指導教官に推薦していただいた留学生については、参加経費の全額を当法人が補助するものであり、初年度に当たる今回は、アジアからの留学生を中心に10人の留学生がこの制度により参加する運びとなった。重要かつ極めてタイムリーなセミナー実現のために種々ご尽力下さった渡辺昭夫氏を初めとする運営委員諸氏、終始熱心な指導を惜しまれなかった各講師、また特にゲストのウォルフレン氏をお呼びするに当たり、お骨折りいただいた国際プログラム委員宇佐美滋氏に対し、この場を借りて改めて深い感謝の意

今回のセミナーは、昨年から始められた「開かれた」日本・総点検」を総合テーマとするシリーズの二回目にあたる。今回は特に、冒頭に掲げた「日本問題」論争の火付け役となったウォルフレン氏自身をゲストとしてお招きする幸運を得、外国人の眼に映じた日本のイメージを通して、「自分たち自身を捉え直すよい機会」を与えられた。応募者は、110名近くにも達し、ホットな話題に対する学生感覚の鋭敏さが示される結果となったが、宿舎の収容人員の制限とセミナーの適正な運営を図るため、最終的には参加者を80名程度に絞り込まざるを得なかった。また、昨今の円高状況に鑑み、一定数の留学生をコンスタントに確保することを目的に、今回から新たに「派遣留学生制度」が設けられた。これは、指導教官に推薦していただいた留学生については、参加経費の全額を当法人が補助するものであり、初年度に当たる今回は、アジアからの留学生を中心に10人の留学生がこの制度により参加する運びとなった。重要かつ極めてタイムリーなセミナー実現のために種々ご尽力下さった渡辺昭夫氏を初めとする運営委員諸氏、終始熱心な指導を惜しまれなかった各講師、また特にゲストのウォルフレン氏をお呼びするに当たり、お骨折りいただいた国際プログラム委員宇佐美滋氏に対し、この場を借りて改めて深い感謝の意

今回のセミナーは、昨年から始められた「開かれた」日本・総点検」を総合テーマとするシリーズの二回目にあたる。今回は特に、冒頭に掲げた「日本問題」論争の火付け役となったウォルフレン氏自身をゲストとしてお招きする幸運を得、外国人の眼に映じた日本のイメージを通して、「自分たち自身を捉え直すよい機会」を与えられた。応募者は、110名近くにも達し、ホットな話題に対する学生感覚の鋭敏さが示される結果となったが、宿舎の収容人員の制限とセミナーの適正な運営を図るため、最終的には参加者を80名程度に絞り込まざるを得なかった。また、昨今の円高状況に鑑み、一定数の留学生をコンスタントに確保することを目的に、今回から新たに「派遣留学生制度」が設けられた。これは、指導教官に推薦していただいた留学生については、参加経費の全額を当法人が補助するものであり、初年度に当たる今回は、アジアからの留学生を中心に10人の留学生がこの制度により参加する運びとなった。重要かつ極めてタイムリーなセミナー実現のために種々ご尽力下さった渡辺昭夫氏を初めとする運営委員諸氏、終始熱心な指導を惜しまれなかった各講師、また特にゲストのウォルフレン氏をお呼びするに当たり、お骨折りいただいた国際プログラム委員宇佐美滋氏に対し、この場を借りて改めて深い感謝の意

今回のセミナーは、昨年から始められた「開かれた」日本・総点検」を総合テーマとするシリーズの二回目にあたる。今回は特に、冒頭に掲げた「日本問題」論争の火付け役となったウォルフレン氏自身をゲストとしてお招きする幸運を得、外国人の眼に映じた日本のイメージを通して、「自分たち自身を捉え直すよい機会」を与えられた。応募者は、110名近くにも達し、ホットな話題に対する学生感覚の鋭敏さが示される結果となったが、宿舎の収容人員の制限とセミナーの適正な運営を図るため、最終的には参加者を80名程度に絞り込まざるを得なかった。また、昨今の円高状況に鑑み、一定数の留学生をコンスタントに確保することを目的に、今回から新たに「派遣留学生制度」が設けられた。これは、指導教官に推薦していただいた留学生については、参加経費の全額を当法人が補助するものであり、初年度に当たる今回は、アジアからの留学生を中心に10人の留学生がこの制度により参加する運びとなった。重要かつ極めてタイムリーなセミナー実現のために種々ご尽力下さった渡辺昭夫氏を初めとする運営委員諸氏、終始熱心な指導を惜しまれなかった各講師、また特にゲストのウォルフレン氏をお呼びするに当たり、お骨折りいただいた国際プログラム委員宇佐美滋氏に対し、この場を借りて改めて深い感謝の意

今回のセミナーは、昨年から始められた「開かれた」日本・総点検」を総合テーマとするシリーズの二回目にあたる。今回は特に、冒頭に掲げた「日本問題」論争の火付け役となったウォルフレン氏自身をゲストとしてお招きする幸運を得、外国人の眼に映じた日本のイメージを通して、「自分たち自身を捉え直すよい機会」を与えられた。応募者は、110名近くにも達し、ホットな話題に対する学生感覚の鋭敏さが示される結果となったが、宿舎の収容人員の制限とセミナーの適正な運営を図るため、最終的には参加者を80名程度に絞り込まざるを得なかった。また、昨今の円高状況に鑑み、一定数の留学生をコンスタントに確保することを目的に、今回から新たに「派遣留学生制度」が設けられた。これは、指導教官に推薦していただいた留学生については、参加経費の全額を当法人が補助するものであり、初年度に当たる今回は、アジアからの留学生を中心に10人の留学生がこの制度により参加する運びとなった。重要かつ極めてタイムリーなセミナー実現のために種々ご尽力下さった渡辺昭夫氏を初めとする運営委員諸氏、終始熱心な指導を惜しまれなかった各講師、また特にゲストのウォルフレン氏をお呼びするに当たり、お骨折りいただいた国際プログラム委員宇佐美滋氏に対し、この場を借りて改めて深い感謝の意

今回のセミナーは、昨年から始められた「開かれた」日本・総点検」を総合テーマとするシリーズの二回目にあたる。今回は特に、冒頭に掲げた「日本問題」論争の火付け役となったウォルフレン氏自身をゲストとしてお招きする幸運を得、外国人の眼に映じた日本のイメージを通して、「自分たち自身を捉え直すよい機会」を与えられた。応募者は、110名近くにも達し、ホットな話題に対する学生感覚の鋭敏さが示される結果となったが、宿舎の収容人員の制限とセミナーの適正な運営を図るため、最終的には参加者を80名程度に絞り込まざるを得なかった。また、昨今の円高状況に鑑み、一定数の留学生をコンスタントに確保することを目的に、今回から新たに「派遣留学生制度」が設けられた。これは、指導教官に推薦していただいた留学生については、参加経費の全額を当法人が補助するものであり、初年度に当たる今回は、アジアからの留学生を中心に10人の留学生がこの制度により参加する運びとなった。重要かつ極めてタイムリーなセミナー実現のために種々ご尽力下さった渡辺昭夫氏を初めとする運営委員諸氏、終始熱心な指導を惜しまれなかった各講師、また特にゲストのウォルフレン氏をお呼びするに当たり、お骨折りいただいた国際プログラム委員宇佐美滋氏に対し、この場を借りて改めて深い感謝の意

今回のセミナーは、昨年から始められた「開かれた」日本・総点検」を総合テーマとするシリーズの二回目にあたる。今回は特に、冒頭に掲げた「日本問題」論争の火付け役となったウォルフレン氏自身をゲストとしてお招きする幸運を得、外国人の眼に映じた日本のイメージを通して、「自分たち自身を捉え直すよい機会」を与えられた。応募者は、110名近くにも達し、ホットな話題に対する学生感覚の鋭敏さが示される結果となったが、宿舎の収容人員の制限とセミナーの適正な運営を図るため、最終的には参加者を80名程度に絞り込まざるを得なかった。また、昨今の円高状況に鑑み、一定数の留学生をコンスタントに確保することを目的に、今回から新たに「派遣留学生制度」が設けられた。これは、指導教官に推薦していただいた留学生については、参加経費の全額を当法人が補助するものであり、初年度に当たる今回は、アジアからの留学生を中心に10人の留学生がこの制度により参加する運びとなった。重要かつ極めてタイムリーなセミナー実現のために種々ご尽力下さった渡辺昭夫氏を初めとする運営委員諸氏、終始熱心な指導を惜しまれなかった各講師、また特にゲストのウォルフレン氏をお呼びするに当たり、お骨折りいただいた国際プログラム委員宇佐美滋氏に対し、この場を借りて改めて深い感謝の意

ゲスト講演要旨

How Power is exercised in Japan?

by Karel Van Wolferen

Unlike what some people have said or imagined, it is never my intention to criticize Japan. First of all I am not talking about Japan or Japanese people. I am talking about what I call the administrators of Japan, top bureaucrats, top one-third of the Jiminto, and top people in business federations and in the large corporations. Secondly my criticism is towards the White House, Reagan government for not having Japan policy. I am only saying there are certain characteristics of the Japanese power system that causes big problems. I think most people in Japan do not think the problem exists.



I want to show you that the problem is on a political level. It stopped being an economic problem long ago, although the symbolism is still economic. What I am saying is nothing to do with Japanese culture. What I am talking about is a political issue. We are talking about how power is exercised and who has the right to exercise power.

We have a problem about who had the right to rule in the Tokugawa period. Tokugawa political settlement is not based on the system of laws that gives Tokugawa rulers actually the right to rule officially. The emperor has to legitimize the shogun's rule. At the end of Tokugawa we have a restoration movement and it is based on the idea that the shogun does not have the right to exercise power. With the Meiji Restoration we have a coalition. If there was a strong prime minister chosen at that time, the coalition would have collapsed. So, we get an oligarchy. When the oligarchy finally gets around to writing a constitution, the constitution appears to turn Japan into a constitutional monarchy with the emperor embodying

sovereignty and everybody else in power exercising power in the name of the imperial will. But the great lack in the constitution is who has the right to actually exercise power. We have groups of powerful people who claim to represent the imperial will, but in fact they represent their own interests. When those powerful people pass away, their successors are pulling the country in different directions. There is no mechanism to coordinate everything. So, we have a clear problem of legitimacy. Under these conditions it becomes quite easy to hijack the country. This is what happens in the 1930s. If there had been genuine leadership, I do not think there would have been the Pacific War.

After the war we have a continuation of this situation. Although the constitution provides for leadership, habits are so strong that the constitution is not followed in essential points. The prime minister or rather the cabinet who has the right to exercise power does not in actual fact have this right. If you do not believe me, just look at the experiences of Mr. Nakasone. He has tried harder than any office of his postwar predecessors to exercise power, and he has failed. Because we do not have strong central power, we do not have accountability in the center.

Because of that, we have problems with the external world. The problem that we are running into with the outside world is that the outside world, especially the United States, is asking supposed leaders of Japan to be statesmen. They have to do something to change the situation. They have to be strong enough to be able to deliver on the promises they make. But the people I mentioned in the beginning are not equipped to play the role of statesmen.

The administrators have been very capable in nurturing a high growth economy and in a few other things like social control. Now they are asked to do something they cannot do, but they have to explain what is going on. There are only two possible explanations. One explanation is that they cannot cope with the situation, and the other is Japan is surrounded by

(CONTINUED ON PAGE 8)

を表わしたい。

ある人がある事柄を問題とするのは、それによって自分たちの既存の「秩序」が不当に脅かされると感じるときであり、その「秩序」を攪乱している者が「問題」であると見なされる。日本という国家、あるいは日本人の行動や態度とそれを支えている価値観は、本当に「国際的」な価値基準や常識から外れているのか（渡辺氏）。

セミナー初日は、各講師が演習内容の予告を兼ね、「外国人労働者」、「防衛」、「企業」、「市場」の4つの視角から、「日本について今何が問題となっているのか」を報告することから開始された。

初めに、小池氏が「外国人の日本の労働市場への流入問題」における「日本人と外国人それぞれによる日本企業及び外国企業の職場慣行に対する誤解」を指摘し、それを受ける形で、山野上氏が、外国人社員の雇用を長年手掛けてきた経験から、日本人が外国人を「外人」としてしか扱わず、結局「お客さんや余所者扱いし、日本社会において自分たちと同じ構成員として認めない特異な態度」について指摘した。

こうした日本人の外国人に対する不慣れな対応の仕方は、日本企業が海外へ進出してゆく時に最も顕著に現われてくる。キム氏は「日本は今世界にとって真に問題だ」と前置きし、「日本は富の蓄積ばかりを行なって、それを世界のため

に少しも還元していない」点を厳しく批判した。このように外国人にとつて、日本が「unhappyな存在」として映る背景には、「日本の世界に与えるインパクトが想像以上に大きくなっていることを日本人自身が明確に認識していない」（草野氏）ことが挙げられなければならない。「日本は世界に対してどのような貢献を果たし得るのか」が、今、問われている。

国際社会の一員として、日本が十分な役割を果たしていないと見られている分野の一つに防衛問題がある。ウエルフィールド氏は「軍国主義であることと軍事力を持つことは必ずしも同じことではない」とし、「日本は確かに米ソのような軍事大国ではないが、今日の自衛隊が持つ軍事力は決して小さなものではない。特に、北米、東アジア、東南アジアの国々が日本の軍事力や軍国主義復活をどのように考えているかを検討しなければならぬ」と指摘し、国際社会の中で日本を考える視野を獲得するために、direct jobとして防衛政策を片隅に追い遣っておくことはできないとの問題提起を行なった。

◇

二日目の午後は、今回のセミナーのハイライトであるウォルフレン氏のゲスト講演と氏を囲むシンポジウムに当てられた。氏は「日本問題」における論点を一つ一つ明確に提起する形で、参加者にそのエッセンスを紹介した（上掲参照）。

氏の問題提起が刺激的であったこと

は、講演の後にフロアーの学生から次々と活発な質問が提出されたことにも表われている。「自分の考えを整理して言葉で発表する能力において、日本の若者の能力が向上しつつある」（渡辺氏）ことが示されたことは大きな収穫であった。

コーヒー・ブレイクを挟んで引き続き行なわれたシンポジウムでは、渡辺氏の司会で、「日本にはリーダーシップがない」とするウォルフレン氏の主張に対して、井上、草野、小池、ウエルフィールドの4氏がコメントーターとなり、各々の立場から自由な意見が述べられた。議論の中味は、氏の指摘は「一方的で具体的な分析に欠ける」（井上氏）とする反論に近いものから、「日本問題」の原因を日本市場の強力な「競争力」に求めた（小池氏）、「指導力の欠如は日本特有の問題ではない」（ウエルフィールド氏）とする見方、日本の政策決定過程の複雑さの実例を紹介し、氏に「基本的には賛成」（草野氏）とする立場まで、各講師によって様々であった。

フロアーの学生からも「強力な権力を握った指導者は、国を誤った方向へ導いてゆく可能性がある以上、ただリーダーシップがあればいいという議論は危険。何のための指導力かが問われなければならないはず」とする反対意見や、特に東南アジアの留学生からは、「『日本問題』は、先進国間での問題であり、そこには第三世界からの視点が全く欠落している。日本は欧米に目を向けるばかりでは

(CONTINUED FROM PAGE 7)

enemies. Because they cannot say they are incompetent, they say Japan is being victimized. That explanation fits in with an old Japanese idea that Japan is the victim of uncontrollable outside forces. So, many people believe it quite easily. That is where you get the phrase "Japan bashing" coming in. There must be anti-Japanese people in America in the same way that there are anti-American people in Japan, and there may be some politicians in America who like to exploit the situation for their own interests. But "Japan bashing," the way in which it is used in Japanese publications and in the words of Japanese officials, means what the governments are asking to do. I think it is highly irresponsible and very dangerous to claim that the American government or governments of other countries are bashing Japan. They are not doing that. They are trying to find a leader in Japan to talk with, a leader who can promise something and who has enough power so that he can deliver on his promises. That is what they are trying to do and this is not what is happening. So, I think the situation is quite problematic and this is what I call the "Japan problem."
(文責・編集者)

なく、もつと後方も振り返る必要があるのではないか」との注文もつけられた。

◇

「日本問題」に関する二泊三日の集中的な討論の中から浮かび上がってきた論点の一つは、「日本問題」の生れてくる背景には、「世界の一割国家」と言われるまでの巨大な経済力を持つに至った「日本の存在」の大きさがあつた。最終日の総括討論で、渡辺氏がコメントしたように、かつてジャーマン・プロブレムやアメリカ・プロブレムがあつたのと同様に、「ある国の経済が急速に伸びて、先進国に追い付き、追い越すようになった時に、この種の問題はほとんど不可避的に起こる」のであり、その意味では「日本問題」は決してユニークな孤立したものであるのではない。日本を巡る「摩擦」は深刻ではあるが、「われわれはあまり目の

前のことばかり目を捕われていると、正しいペースをクティツを失う」（渡辺氏）危険性があることにも注意しなければならぬ。ウォルフレン氏の親しい友人である阪中氏によれば、ウォルフレン氏は、氏の論文に対する日本側の反論がすべて日本を弁護するものばかりで、そのmonisticな反発の仕方に強い不満を抱いているという。その点、セミナーで「複数の角度から多様な意見がたくさん出された」（阪中氏）ことは喜ばしい。

日本人が意識するとしなやかにかかわらず、国家としての日本が他国にとつて潜在的な脅威と映る以上、これからの日本には、その政策決定システムの透明度(Transparency)（草野氏）をできる限り高め、「自分自身を的確に外国人にも分かる言葉で説明する」（溝田氏）努力が強く求められている。「日本問題」が出

千人会

'87年9月11日

◇現在会員一五二六名(実会員数)

◇(会算入者一、七九六名)

◇新しく会員となられた方々

C 日本大学教授

B 東京外国語大学教授

A 中央大学学生部助育担当部長

C 一級建築事務所

C 東京都立大学助教

◇会費ありがとうございます。

大西捷治、荻原洋太郎、村上陽一郎、滝口亨、古本捷治、荻原洋太郎、村上陽一郎、滝口亨、中島文夫、早弓惇、石井竹松、船山信子、平井久、島岡丘、朽津耕三、古屋野正伍、白濱謙一、尾形典男、福田一郎、加藤栄一、百瀬宏、大沢綱一郎、下田弘、武藤英輔、福島正久、小林祐子、三村卓雄、石村善助、井深淑子、沖塩莊一郎、林勲、松田武彦、小和田恒、長松昭男、寺川国秀、千葉正士、柳下綱道、山本茂、岡村甫、谷俊治、木村宗男、島田治夫、榎林博太郎、児玉昭太郎、森川八洲男、扇谷高、稲垣寛、土屋哲、渡辺昭夫、吉利和、後藤米夫、大河内繁男、池上秋彦、伊能敬、釜范善一、鞍馬菊枝、鈴木忠義、高村多賀子、井手久登、加藤五六、大東百合子、朝倉孝吉、鈴木守、河野恵、坂本義和、尾形憲、田村康男、加藤一郎、岡茂男、岡本昌秀、小堀桂一郎、出居茂、長津一郎、岡野澄、井門富一夫、神田信夫、石橋秀雄、久武雅夫、平野敬一、沖中重雄、木村富夫、岩崎不二子、平野敬一、東寿太郎、笠井五郎、西野万里、平野敬一郎、安嶋彌、高橋泰蔵、川村亮、小川智哉、田中弥寿雄、小林善彦、島田外志夫、久場雄子、井関利明、伏見弘、板垣與一、小田中敏男、前川真理、小川芳男、新谷麗造、江尻美穂子、鈴木順子、田村敏、新田悟、大竹誠、奥田真丈、今井淳、布川角左衛門、久保良雄、松岡八郎、小田切美文、鈴木喬、鳥居泰彦、平沢興、平沢茂一、飯田経夫、伊藤修、酢屋善元、川原栄峰、日高精一、米満澄、齋藤信房、松田徳一郎、石川正一、森岡清美、佐原六郎、武者小路公秀、村上健、田島澄江、高橋三郎、佐々木克己、伊藤成彦、宮野彬、松

室本 誠二殿

窪田 富男殿

新谷 麗造殿

朝倉 弘之殿

戸張よし子殿

田稔子、関口利男、横山実、小田滋、坂野親司、森中真、貝塚爽平、岡岡昭夫、藤村隣一、鶴岡義一、福田隆義、大貫一、磯部浩一、川鍋正敏、田端光美、秋田成就、森田信義、山本登、小川捷之、伊藤玄三、吉沢英子、横田澄司、片山寛、太田時男、佐藤健生、大坪秀二、山本大二郎、佐藤孝子、塩見利夫、田中外次、宮崎繁樹、笹島恒輔、高野雄一、中沢正和、中井虎一、林藤次郎、坂口順治、八木江里、八戸信昭、水野伝一、神戸愉樹美、高橋彰、山本よしゑ、飯野利夫、樫木隆一、若林俊輔、宇都栄子、石川明、今井哲哉、祖父江孝男、篠沢公平、竹内与之助、友部直、国分康孝、篠藤方哉、田原虎次、熊川忠、山口高康、矢澤修次郎、新井益太郎、近藤保、勝木保次、大神田正儀、青木生子、谷重雄、村井資長、隈部直光、小松八郎、末永國明、大地羊三、松元文子、田村光三、岡野治、速水佑次郎、外池孝雄、藤田淑子、森繁雄、敬称略

◇千人会員からのたより◇

一昨年から専修大学に移り、柚木のセミナー・ハウスにはすっかり無沙汰です。時折、昔をなつかしく思っています。

専修大学教授 石村善助

◇四年間海外にいました。わずかで恐縮ですが、A会員になりました。四年前とあまり人数が変わらず、寄付金額も少ないようです。頑張りました。日本の未来は若い人にかかっていますから。 安田生命 島田治夫

◇大学情報処理教育の実状調査のため、海外に出張しており、送金が遅れましたが、セミナー・ハウスの発展を喜んでる者の一人です。 専修大学学長 小田切美文

◇退官以来一病息災、時々机に向う毎日を通してあります。学生たちとセミでお世話になった日々を懐かしんでいます。 元東京外国語大学教授 竹内与之助

◇57歳の誕生日でした。すべての人に感謝して喜捨させて頂きました。 東京理科大学教授 国分康孝

◇今年も、千人会の会費を今まで通りお送り出来まことを感謝しています。 明治大学教授 小松八郎

た後のアメリカ政府の対日交渉の態度には明らかにウォルフレン氏の影響が見られる。(宇佐美氏) という。参加した留学生からも「日本はいつも守勢に立ってばかりいるのはおかしい。主張するべきことは、もっとはっきりと主張するべきだ」との声が聞かれたが、日本のやり方に対する不満が続出しているということ。裏から見れば「外国人からの批判を逆にわれわれの武器(宇佐美氏)として、今こそ日本がイニシアティブをとって、オリジナルな解決を見い出す絶好の機会」ともなし得るはずである。

とまれ、大切なことは、ウォルフレン氏も繰り返し強調したように、「問題」の原因を詮索して、相手を非難すること

参加者の感想から

日本滞在のハイライト
満足した日本人学生との徹夜の討論
早稲田大学商学部2年 吳 欣達(台湾)

私は、今回初めて、国際学生セミナーに参加したが、日本に来てから最高と言えるほどいい体験であった。日常生活でも、日本人と日本にいる外国人と話す機会はいくらもあるが、今度のように、三日間続けて一つのテーマに絞って意見を交換することは初めてである。本当に一時も無駄ではなかったと思う。私の参加したCセッションではほとんど寝ずに徹夜で討論した。時間をかけて、細かいところまで目配りし、全員の合意を得ることを大切に日本のやり方をみせてくれた。

ウォルフレン、さんの書いた「Japan Problem」については、いろいろ高名な学者からの反論があるが、私は、特に日本人学生の意見を聞きたかったので、参加した。日本人は、「キャッチボールのできない野球狂」と言わ

ではなく、現に目の前に存在している「問題」をいかに解決するか(草野氏)ということである。

今回のセミナーでは、「日本人学生と留学生の間で、特に言葉の問題を巡ってとてもよい協力関係が成り立った」(渡辺氏)が、このような「付き合い方」の一つ一つの積み重ねの中にこそ、案外「問題」解決への突破口が潜んでいる可能性もある。このセミナーが、将来の日本の国際化への道を切り拓いてゆく若い世代にとって持つ意味は、決して小さくはなかつたはずである。

れているが、次の世紀を担う学生は、このウォルフレンさんから投げられたボールをどういうふうを受け取るのかを知りたかつたわけである。拾って、投げ返すか、あるいは、キャッチボールは、欧米流のコミュニケーションであり、日本人には、やはり、相手のことをよく考えながら、根回しするなど日本流のやり方がふさわしいのか。

三日間の討論を通じ、私は、「日本問題」とは日本の文化や価値観に関わる問題であり、問題の焦点は、結局日本人のアイデンティティにかかっているのではないかと思つた。日本人は、はつきり自己主張しないと云われるが、私は日本人はもつと自分に自信を持つた方がよいと思う。「貿易摩擦においては、米国が悪い」という主張自体もそれなりの価値があると思う。迷っているのが一番こわいことではないだろうか。自分たちに何ができるかわからないからである。

国際学生セミナーが話し合つて、相互に理解し、視野を広げる交流の場を作ってくれたことに、私は本当に感謝している。短期間に深く、幅広い交流ができたことは忘れがたい、素晴らしい経験であった。

第66回理事会

87年10月24日/国立教育会館(虎の門)

〔出席者〕

(理事) 中川秀恭、飯田宗一郎、三宅彰、崎田直次、田中郁三、天城勲、村山松雄、立野晴夫、小山五郎(代理瀧澤英一)

(監事) 喜多勲

委任状によるもの理事10名

(順不同・敬称略)

中川理事長が開会の挨拶の後議長となり議事に入る。立野専務理事より議案につき逐次提案説明があり、若干の質疑応答のち各案件を承認可決した。

▽役員人事について

立野晴夫専務理事の辞任に伴い、その後任者に柏木茂氏(筑波大学学生部長)が11月1日付で新専務理事に就任することを承認。

▽昭和62年度一般会計・臨時部会計補正予算について

新国際館の建設に伴う建設資金不足分を補填するため一般会計より資金繰入が必要となるので、積立預金を取り崩し臨時部に繰入れることを承認。

▽「資金体系の運用基準」案について

前回理事会で検討を委嘱された崎田専務理事、宇野運営委員による予備的報告(基本方針)を提出されたが、更に当法

人の組織及び業務の運営に適合するよう簡素化し、現行規程との整合性を考慮して労組と協議の上修正するよう継続交渉すること承認。

国際館建設のための

開館20周年記念募金第六回報告

(87年11月末日現在)

申込総額 一四一、二八六、〇〇〇円
(内入金済 一三九、〇五一、〇〇〇円)

内訳

財界関係 六六件 一三一、七二〇、〇〇〇円
大学 三五件 四、四六〇、〇〇〇円
一般 二二件 七三五、〇〇〇円
個人 二五二件 四、三九一、〇〇〇円

・寄付申込者ご芳名(申込順)

◎財界関係

株式会社リクルート殿

三菱地所株式会社殿

石油連盟殿

ジャスコ株式会社殿

社団法人セメント協会殿

株式会社トーメン殿

富士ゼロックス株式会社殿

アルプス電気株式会社殿

凸版印刷株式会社殿

◎大学

聖心女子大学殿

芝浦工業大学殿

◎一般

一〇、〇〇〇円 まるかね商店有限会社殿
五〇、〇〇〇円 有限会社昭和空調設備殿
五、〇〇〇円 由木自動車殿
二〇、〇〇〇円 安藤自動車株式会社殿
個人 二〇、〇〇〇円 東洋大学教授白川和雄殿

五、〇〇〇円 労働基準管理協会

一〇、〇〇〇円 山田耕司殿
二〇、〇〇〇円 専修大学教授竹林代嘉殿
原クリエイトブディレクション
丸岡俊之殿

ご挨拶
専務理事就任に当って



柏木 茂

昨年十一月、専務理事に就任以来、国際学生セミナー、大学共同セミナー、その他研修等の行事を経験しましたが、これらのセミナーに参加した学生諸君のたくましい学習意欲に目をみはりました。彼ら学生諸君を見る限り、わが国の将来に大いに期待がもてる思いがいたしました。学生諸君は数日間の生活体験の中で、ほんとうの学問をしたという満足感を得たことでしょう。と同時に、一つの大学の枠を越えて、他大学の学生との友情を育てたことは、貴重な体験であったと思います。

大学セミナー・ハウスは、このようにいろいろな人たちとの交流を通して、人間の共感が得られる場であり、多摩の

自然の中のオアシス、いやユートピアといえましょう。
交流ということは、いうに易く、行うに難いと思います。大学内での交流は可能としても、大学間の交流には適切な受け皿が必要です。

私は永年、学生の厚生補導という業務にたずさわってきましたが、その間の私のモットーは、「学生のために何をしてやれるか」ということでした。

私は、これからも大学セミナー・ハウスが、学生諸君のための諸活動を中心とした大学間交流の場として、更に充実、発展していくことを願い、各方面の御協力をいただきながら、そのための触媒としての役割を果たすべく、全力を尽してまいりたいと念じております。

* * *

柏木 茂氏略歴 昭和4年1月17日生。29年東京大学教育学部卒、同年、文部省調査局調査課をふり出しに、43年京都教育大学学務課長、49年東京大学学務課長、56年大阪外国語大学学生部次長などを歴任。61年筑波大学学生部長、62年10月退職。

間接的な共感が得られる場であり、多摩の

昭和62年度 協力会員校事務連絡会

33大学から学生課職員41名が出席して

87年10月14日/10時半〜16時

会員校との緊密な連絡をとり、相互に情報を交換することは、当ハウスの事業の運営を円滑に行なうためには極めて重要である。今年度の事務連絡会は通算18回目となるが、日頃、会員校側の窓口となっておられる学生課を中心とした職員の方々41名にご参集いただき、ハウスへの一層の関心を高めていただくことができた。

プログラムは立野専務理事の概況説明につづき、施設見学が行なわれた。午後は昨年と同様、中央大学学生部助育担当部長・新谷麗造氏に座長の労をとっていただき、副座長に大妻女子大学学生部長・緒方真也氏を推し、協議会に入った。約二時間に亘る意見交換の後、交友館で催されたパーティーでこの会を閉じた。限られた時間ながら、会員校の出席者相互の交流、親睦を深める機会ともなった。

なお、協議会では施設全般の印象や事業内容についての所感に併せて、いくつかの改善要望が出された。中でも簡易スポーツ施設の整備は毎年、出される最大の懸案事項であろう。



キャンパス見学を終えて (ようこそ広場)

〔出席者〕

- ・東京(青木節・二橋(油田洋彰、松本光二)
- ・東京工業(三好清勝・東京外国語(大島俊宏)
- ・筑波(関根正義)・千葉(伊折利晃)
- ・埼玉(鈴木将士・早稲田(榎本光伸・慶応(大田健一)
- ・日本女子(田宮良子・明治(渡辺和夫、滝島寿徳、速藤良平)
- ・中央(新谷麗造、小泉、村上)
- ・立教(山下泰弘)
- ・武蔵工業(市川康)
- ・明治学院(熊坂勝雄)
- ・成蹊(伊藤暉夫)
- ・国際基督教(鈴木幸夫)
- ・武蔵(松本建彦)
- ・大久保武(上智(高橋宏公)
- ・東京経済(樋口喜夫)
- ・大妻女子(緒方真也)
- ・学習院(今枝秀樹)
- ・成城(古川米男)
- ・聖心女子(吉川美紗子)
- ・工学院(小西義信)
- ・芝浦工業(山田清人)
- ・東京農業(菊地由美子)
- ・帝京(平本直哉)
- ・淑徳(小野寺利幸)
- ・長沢正志(文京女子短(小河織衣)
- ・東京工業高専(速藤久美子)
- ・東京都立医療技術短(横山友子、大坂仁志)

昭和62年度

第2回共同セミナー委員会

87年10月20日/私学會館

〔出席者〕 竹内啓、小浪充、江沢洋、山下幸夫、栗原彬、鈴木和子、川端香男里、坂本百大、桜井哲夫、袖井孝子、小川捷之、笹川紀勝、佐藤敬三、アンセルモ・マタイス(敬称略)

前記14名にハウス側から中川館長、企画室スタッフ3名が出席。竹内委員長が議長となり、次のように議事を行なった。

- (1) 本年度前半期の実施報告及び後半期の準備状況
- (2) 昭和63年度年間計画について

決定したテーマ案・運営委員

- ・第144回大学共同セミナー(88年6月17〜19日)「認知科学」(坂本百大)
- ・第145回大学共同セミナー(11月11〜13日)「アジア史の中の日本」(笹川紀勝)
- ・第146回大学共同セミナー(12月9〜11日)「プロイトとユング」(小川捷之)

(3) 年間計画の再編成について

大学間交流の実を更にあげるために大学合同セミナーを年1回から2回にすること、及びセミナー参加者への単位認定の是非についての意見交換がなされた。企画室が意見をとりまとめ、更に次回委員会にて継続審議していくことになった。

寄付金 報告

87年6月〜11月

△一般寄付金▽

- 二、五〇〇円 学習院大学児玉ゼミ一同殿
- 一〇、〇〇〇円 東京理科大学クライツィングゼミ一同殿
- 三、五〇〇円 東京薬科大学新歓実行委員会殿
- 一〇、〇〇〇円 東京純心女子短期大学修養会殿
- 三、〇〇〇円 小宮山猛殿

△教育プログラム資金▽

- 一〇、〇〇〇円 第15回十大学合同セミナー殿
- 六、六五〇円 第8回大学院共同セミナー殿
- 二七、八三三円 第14回国際学生セミナー殿
- 一、一八三円 第14回大学共同セミナー殿
- △植樹資金▽
- ひめしゅら一株 第10回大学合同セミナー参加者一同殿
- うすら梅一株 国際基督教大学心理学サマ
- つつじ他 1・セミナー参加者一同殿
- 花ざくら三株 布施壽雄殿

- 青しだれ 日本オセアニア学会殿、国立民族学博物館殿、インド太平洋先史学会殿
- さんしゅゆう インターカレッジ人間関係ワークショプ殿
- 六三、〇〇〇 昭和62年度文部省厚生補導事務研修受講者一同殿
- 一〇、〇〇〇 アモルフラスセミナー殿



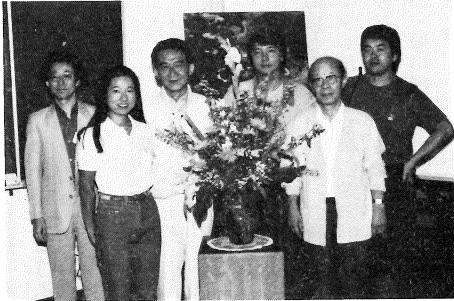
一福亭への小道——大学セミナー館から——

業／務／通／信

87年9・10・11月
秋のキャンパスから

残暑の9月、記念樹のハナミズキが紅葉し赤い実をつける10月、そしてこの丘の雑木林が黄土色に変わる11月——この秋も、ゼミナールの合宿に加えて「学内交流」「大学間交流」「国際交流」の多彩な合宿研修が繰り広げられた。この三ヶ月間には二九七(月平均九九)グループ、延べ一万一、五七六(同三、八六〇)人が来泊された。

●前田愛先生を偲びつつ——15年目の立教大学集中合同講義



集中合同講義のスタッフ——故前田愛先生に捧げた花を囲んで、左から3人目が渡辺一民氏(別掲追悼文の筆者)

9月は夏休み終了前の合宿が集中す

る。その中で、立大文学部が主催する恒例の「学内交流」——「集中合同講義(A)」は今年15回目を迎えた。今回のテーマ「世紀末か二〇〇一年か」をめぐる学年・学科をこえた教師・学生五〇名が学際交流の四泊五日をすごし、中日には「絹の道」や「動物園」への遠足にも出かけた。

例年同様の展開であったが、そこには前田愛先生のいつもの元気なお姿が見られなかった。集中合同講義の創始者の一人で、この十五年つねにそのプロデューサーをつとめてこられた前田先生の急逝は、その二ヶ月ほど前のことであった。

ゼミナール室には、ハウス職員によって前田先生への感謝をこめた花が活けられ、最終日には参加者全員がそれを囲んで記念撮影をして、恩師を偲んだ。「困難にとらわれぬ自由な大学と学生」を求め、それを「可能にする」「自由な空間」に近いもの」としてこの丘を愛された前田先生は、ハウスのかけがえのない理解者・協力者の一人であった。73年以降四つの共同ゼミナールで指導教授を、そして80年からは四年間共同ゼミナール委員をつとめられた。ともに集中合同講義を推進してこられた渡辺一民教授が前田先生をお偲びして下掲の一文をお寄せ下さった。

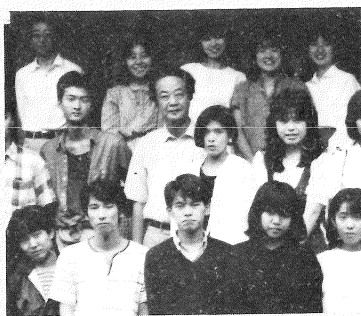
●大学間交流の諸集会——初の国連大学グローバル・ゼミナールなど

ハウス主催の共同ゼミナール(二七大、二七六)、国際学生ゼミナール(二四大学)、大

追悼

前田愛さんと集中合同講義

立教大学文学部教授 渡辺 一民



最後の来館となった'86年秋の合宿で学生に囲まれる前田愛先生(遠来荘の庭先で)

ある。

思えば大学紛争への反省から生まれた集中合同講義という新しいころみで、過去十五年間ほとんど一人でささえてきたのが前田さんだった。そもそもこのころみを八王子のゼミナール・ハウスでやることを提案したのは前田さんだったが、ゼミナール・ハウスの空間的配置と環境をこよなく愛していた前田さんは、合宿のあいだに生まれてくる参加者のあいだの熱っぽい知の運動を、このユニークな空間のなかで活性化することがじつに巧みだった。だから立教の学生は時に応じて遠来荘も中央ゼミナール館もあらゆる施設を思いのまま利用したと言つてさしつかえあるまい。その前田さんの夢は、そうした八王子での成果をフィードバックする仕掛けを大学のために創り出すことだった。おそらくその夢の実現こそ、生前前田さんと一緒に毎年のように八王子を訪れていた私たちに残された今後の仕事だと言えるだろう。それにしてもあまりにもあつてなく逝ってしまった前田さんを思い出すたびに私のうちに浮かんでくるのは、逆三角形の本館を山頂にいたたくゼミナール・ハウスの初秋のたたずまいなのである。

学教員懇談会(二八大学)(いずれも実施報告が別掲)をはじめ、自主ゼミとして独立して五年目、通算八回目の社会学合同ゼミナール(三三大学五ゼミの参加、テ

マは「21世紀を考える」が開催された。他に中央大学経済学会の「四大学インターゼミナール」「現代日本経済研究会(三三大学)など、



国際シンポジウム
「太平洋地域における孤立と発展」

上の組み写真は、講堂での討論風景。左下中央の女性がバーンスさん(下の感想文の筆者)

Inter-University Seminar House Re-Visited

22 years ago as a raw high school graduate from Colorado, I attended my freshman orientation for International Christian University at this Seminar House. I remember a very pleasant day spent with my Japanese 'sister' in the newly built, unusually-shaped *honkan*.

Imagine my surprise at re-visiting the Seminar House as an archaeologist for the conference "Development and Isolation in the Pacific" to find not just one Seminar House but a whole campus. Such expansion and prosperity is truly deserved by the community of people who use these comfortable facilities to further international and inter-personal understanding and knowledge.

Dr. Gina L. Barnes
University of Cambridge

「自然の中での共同の生活と交流」をことのほか喜ばれたのである。

●本格的国際シンポジウム——日本オセアニア学会などの集会
この秋ハウスで開かれた国際的な集会以主なもの、ともにシンポジウムで、日本オセアニア学会の「太平洋地域における孤立と発展」と日本バキスタン協会の「日本・バキスタン——カイシャの論理」である。後者は昨秋に続いて二度目だが、前者は尾本恵市・東大教授(前共同セミナー委員)とハウスのご縁から初めて「誘致」された本格的国際学会である。正確には日本オセアニア学会・国立民族学博物館・インド太平洋先史学会の三者の共催によるもので、アメリカ、イ

ギリス、オーストラリア、インド、中国、東南アジア、オセアニア地域など一〇数カ国からの考古学者が第一線の研究者七〇名が9月4日から三泊し、文化の孤立と発展をめぐってグローバルな視点から討論した。
なお、参加者の一人、ケンブリッジ大講師のジーナ・バーンスさんは二年前ぶりのハウス再訪を喜ばれた。当時一八歳、ICUのフレッシュマン・キャンピングで初めてこの丘の生活を体験したことが、深く印象に残っているという。早速その感想(別掲)を綴って下さった。また、参加者全員から三株の記念樹が贈呈された。「自然の中での共同の生活と交流」をことのほか喜ばれたのである。

国連大学グローバル・セミナー(一三一名)が夏休みも終りに近い9月7日から一週間開催された。このセミナーは国連大学が七大学(青山学院、慶応義塾、国際、国際基督教、中央、上智、津田塾)と共催で毎年9月に開くもので今回で三回目、当ハウスでの開催は初めてである。「開発と国連」をテーマに、日本の経済援助の在り方などをめぐって活発な議論が行われた。講師には武者小路公秀・国連大学副学長はじめ川田侃、東寿太郎、横田洋三、百瀬宏の諸氏らハウスともご縁の深い方々が多数来泊された。

学生代表の赤堀毅君(東大4年)は送別パーティーのスピーチの中で「開発の問題を考えるのにふさわしい、人間と自然の調和のとれた環境を与えて下さったセミナー・ハウスと職員の方々に感謝します」と述べた。また、会期中に行われたハウスのお月見交歓会(九グループ・二二七名)の席では、武者小路副学長が在泊者に同セミナーの紹介をかねてスピーチをされた。

●「10周年」を祝った三つのグループ
左記三グループがこの秋ハウスでの合宿10年目の「一里塚」を記録した。

① 津田塾大学「学内・ITC」
文字どおり24時間、日本語は一切ご法度の、生きた英語の集中訓練コースは、全学年、学科の学生を対象に行われており、今年には34名が参加した。寝食を共にすることから生まれる連帯感で、すぐ教師と学生がとけ合って効果は満点という。10周年を祝って最終日に交友館でティー・パーティーが催された。

② インターカレッジ人間関係ワークショップ
人間関係ワークショップまたはエンカウンター・グループと呼ばれる合宿がハウスで近年ますます盛んである。

10月の連休だけでも都立大(鳴沢実助教授)、東京理科大(国分康孝教授、東大(見田宗介教授。他にもICU(都留春夫教授)の合宿などがある。大きな名札を紐で首からたらし、食堂にくる男女大学生の集団は、東京理科大学の国分教授による人間関係ワークショップ。今では他大学の学生も参加し、そのリュニオンには幼い子を連れたOB、OGの姿も見られる。10月10日、10周年を記念する植樹とパーティーが行われた。本号の

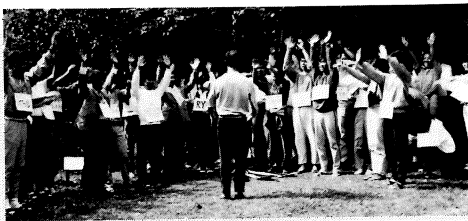
インターカレッジ人間関係 ワークショップ

「実家の表札」となった十周年記念樹

東洋理科大学OB 堀内治郎

「出会いの丘」に、この秋、一本の樹を植
えさせていただいた。「さんしゅ」の樹。
私たちがあって、いわば実家の表札ともい
べきものである。

私たちの「人間関係ワークショップ・リユ
ニオン」がこの丘に集うこと、今年で七年目
である。母体は、国分康孝教授（東京理科大
学）の主宰されている「インターカレッジ人
間関係ワークショップ」であるが、こちら
は87年夏に十周年を迎えた。このワー
クショップの体験者を中心として、全く自主的
に、一年がかりで企画し、運営しているのが
私たちの集いである。対象となるメンバーは
現在約三五〇名程。首都圏在住者が多いが、
全国に散っているので毎回五十名前後が参加
している。



記念植樹式を終えて（'87.10.10）——出会いの深ま
りと広がりを願う

大きな名札
を首から紐で
たらし、そこ
に書かれたベ
ネームで関
わり合う二泊
三日。大学セ
ミナー・ハウ
ス独特の雰
気も手伝っ
て、日常にな
い時間を共有
できる。各人
の責任にお
いて、全く自
由な関わりが
持てる。あり
方のようなあり
方が試みるこ
とができる。

そうした中で懐かしい仲間との語らいは、多
くの新しい発見を生む。相手のみならず自ら
に關しても、である。

この、自らを知る手立てを私たちはこの集
いに求めているのかも知れない。非日常の、
放縦でなく自由な中で十分な自己開示と
フレンドシップによるエンカウンター。そこ
に、新たな自他の発見および心と心とのふ
れあいを求めるのである。また、自己表
現訓練、傾聴訓練、集団討議などといったプ
ログラムの展開を通しての具体的な体験は、
日常生活への応用のヒントとなる。

今年には私たちの「母体」の十周年を記念し
て植樹を行った。ささやかながらパーティー
を催し、小さな縁の集合体であるこの集いの
一層の深まりと広がりを願った。国分先生は、
植えられた樹について、「師と弟子と場の三
者の縁が凝集したこと象徴である」と語っ
た。

現象学・解釈学研究会

十年の歩み

東洋理科大学非常勤講師 岸 恭博

私達の研究会が誕生することになった契機
は、昭和52年12月、「理性と想像力——現代
哲学の基本課題——」をテーマとした第95回
大学共同セミナーであった。そこでの五つ
の「セクション演習」のひとつが、新田義弘教
授（東洋大学）の指導で行なわれたが、この
とき、現象学への共通の関心が参加学生達を
結びつけていたのである。

翌年、セミナー・ハウスでふたたび合宿を
しようという声があがった。折しも、日本現
象学会発足の動きもあったときである。そ
で、共同セミナー参加者を中心にして、いわ
ば口コミで呼びかけ、第一回目の研究会をひ
らいた。当初は、学部の学生と院生が中心で
あり、卒論や修論の内容を持ち寄って発表し、
討論した。

以後は、若手研究者も参加するようになり、
学生や院生にとっては、より一層の刺激と
なった。そして、参加者も、哲学だけではな

「わたしたちの合宿」（14頁）ではOBの
堀内治郎氏にその模様をご報告いただい
た。

③ 現象学・解釈学研究会

10年前の第95回大学共同セミナー「理
性と想像力——現代哲学の基本課題」の
Cセクション「想像力の現象学的考察」
（新田義弘・東洋大教授）を母体として
発展した自主研究会である。当初は六大
学からの共同セミナー参加者七名がメン
バーであったが、今では北海道から九州
までの五二大学（今回の合宿参加は三六
大学・四四名）へと全国的な広がりを見



10年目の記念撮影（'87.11.22）——前
列左から4人目が新田義弘先生

く、美学、医学、社会科学、体育学等、多様
なものになって、大学の枠ばかりではなく、
学問分野の枠をも超えていった。

以上の場所という意見もあったが、これを
利用し続けた。今では、「八王子」と言えば
会員には通じる。今年の八王子には行くか？
今年の八王子で発表したらどうか？
こうして今では合宿の参加者数も、三、四
十人へのぼり、当初、学生であった者は院生
になり、院生であったものは講師や助教に
なった。今回は、北海道や九州からはるば
る参加してくれた人もいる。会員の所属大学数
となると、五十大学を超えている。高校教師
もいる。医師もいる。出版社の人もいる。泊
り込みであるので、研究発表やシンポジウム
の時間は限られていても、それ以外の時間を
利用することができる。学会などではそ
ういうことがない。こんなところにも、この
会が続いてきた原動力のひとつがある。人が
いなければ学問も無い。人と学問との交流を
通じてこそ、人も学問もすすんでゆくのであ
ろう。

この研究会のささやかな成果のひとつが、
『現象学・解釈学』（世界書院）として出版さ
れる。この会が、今後どのような展開をみせ
るか、それはわからない。ともあれ、来年の
仮予約をすませて、十年目の研究会を終えた
のである。

るにおよんだ。近くその研究の成果が出
版物になるという。

11月の連休に二泊した今回の研究会で
は、中日にようこそ広場で祝10周年の記
念撮影が行われ、毎年欠かすことなく出
席される新田教授を囲んで全国からの参
加者が勢揃いした。共同セミナーでの出
会いを一粒の種子にたとえるなら、その
光景はあたかも10年を経て枝葉を豊かに
茂らせた大樹を見る思いであった。「わ
たしたちの合宿」では当初のメンバーの
一人、岸恭博氏（当時東洋大、現在東京
理科大学非常勤講師）に「共同セミナーか
らの10年」を振り返っていただいた。

利用状況

* 11月2日 回利用
* 11月3日 回利用
日帰りを除く

9月 (26グループ、延五、〇七五人)

東京大学言語研究会
慶応義塾大学英語会スピーチセク
ション

武蔵大学教授
日本大学教授

青山学院大学教授
東京経済大学税理士受験会

大妻女子大学教授
法政大学技術連盟グループリーダー
スキャン

東京大学実定法学習会
杏林大学助教授

駒沢大学助教授
慶応義塾大学英語会ディベートセク
ション

中央大学生協同組合
東京大学助教授

武蔵大学助教授
早稲田大学法学研究科若手研究者の会

慶応義塾大学英語会ディスカッション
国際基督教大学教育哲学研究会

東京大学助教授
学習院大学助教授

駒沢大学英語会
早稲田大学雄弁会

明治大学教授
中央大学教授

立教大学教授
東京学芸大学教育史講座

法政大学教授
明治大学助教授

東京経済大学助教授
学習院大学助教授

駒沢大学助教授
早稲田大学助教授

慶応義塾大学理工学部英語会
青山学院大学教授

神谷 不二
深沢 実

成蹊大学教授
中央大学教授

工学院大学教授
早稲田大学講師

慶応義塾大学助教授
青山学院大学助教授

東京経済大学講師
駒沢大学教授

立教大学教授
津田塾大学内I.T.C

東京経済大学文書管理検討委員会
芝浦工業大学教授

上智大学講師
東京学芸大学生活協同組合

明治学院大学文化団体委員会
グループスキャン

明治大学教授
東海大学助教授

慶応義塾大学哲学研究会
慶応義塾大学助教授

立教大学文学部集中合同講義A
慶応義塾大学助教授

立教大学講師
慶応義塾大学東洋史学研究室

立教大学教授
早稲田大学講師

早稲田大学講師
千葉大学助教授

明治大学講師
東京農業大学栄養化学研究室

東京農業大学短大栄養化学研究室
東京大学教授

早稲田大学教授
早稲田大学教授

日本女子大学教授
立教大学栗原・川原組基礎文献講読

淑徳大学助教授
東京大学助教授

一橋大学ジェンダー研究会
上智大学教授

都留文科大学教授
茨城大学卓球部

東京女子大学短期大学部オルフェウ
スクラップ

昭和女子大学短期大学I.T.C
相模女子大学教授

昭和女子大学講師
フランス語教育振興協会

文部省科研費総合研究班
日本オセアニア学会

東京中野モラロジ事務所
日本精神科看護技術協会東京都支部

カネバキリスト教会
カンパウンド長老キリスト教会

東京国際基督教会
東京教会

全国友の会関東支部
阿部興業

外野 重昭
宇野 寛
山下 実
深沢 司

山田 太門
大住 圭介
森反 章夫

浅野 利弘
吉野 克巳
利弘

大塚 正久
宇野 重昭
重昭

森川八洲男
小中山 彰

迫村 純男
慶応義塾大学助教授

立教大学文学部集中合同講義A
慶応義塾大学助教授

和田 安弘
慶応義塾大学東洋史学研究室

茂木 虎雄
武澤 信一

北野 弘久
長倉 康彦

田村 恭
林 陽一

高 陽一
坂本 義和

武彦 武彦
梶原 正昭

中島 邦
佐藤 八十八

平井 久
山田 経三

和田 明子
明子

野村尚三郎
木村尚三郎

桜井 毅
桜井 毅

石川 力山
石川 力山

馬田 啓一
馬田 啓一

松本 貞一
松本 貞一

河野 一英
河野 一英

林 昇一
林 昇一

松瀬 貞規
松瀬 貞規

川路 神治
川路 神治

徳永 英二
徳永 英二

栗原 福也
栗原 福也

福也 福也
福也 福也

拝復 このたびはご丁寧なお手紙と
郷土色豊かな絵葉書をいただき、あ
りがとうございました。来春、私は
定年となりますので、今度が東大の
ゼミ学生とのハウスでの最後の生活
となりましたが、これまでにたく学
生諸君も力を入れてくれて、とても
充実した二日間でした。緑の深いセ
ミナー・ハウスのよいお仕事が一層
発展されることを期待して御礼に代
えさせていただきます。お元気で。
坂本義和

10月 (70グループ、延二、二四八人)
東京学芸大学生活協同組合
お茶の水女子大学教授 宮島 喬
慶応義塾大渡部・上松・佐藤研究室
千葉大学助教授 工藤 秀明
東京都立大学社会生活研究会
東京理科大学教授 狩野 紀昭
東京理科大学教授 沖塩 一郎
日本大学書道研究会
明星大学助教授 吉田 恒雄
東京大学講師 内田 慎一
電気通信大学ユネスコ研究会
早稲田大学教授 見田 宗介
上智大学教授 今井 圭子
東京理科大学人間関係ワークショップ
プ・リユニオン
東京都立大学助教授 鳴沢 實
東京女子大学講師 萩原 康子
東京女子大学講師 池田 謙一
順天堂大学病院業務改善セミナー
日本大学講師 二宮 順
東海大学教授 師岡 孝次
学習院大学シニイクスピア劇研究会

September 22, 1987
TO : The Director and Staff of the
Inter-University Seminar House,
site of the 1986 Fourth International
Symposium on Social Development,
Hachioji, Tokyo, Japan.
Resolved
The Board of Directors of the In-
ter-University Consortium for In-
ternational Social Development at
this, our annual meeting, expresses
its grateful appreciation to the
Director and Staff of the Inter-Uni-
versity Seminar House.
Their devotion to service and
outstanding hosting contributed
substantially to the success of this
symposium which will long be re-
membered by all who participated
in the deliberations.
Richard J. Parvis
Richard J. Parvis
Secretary-General, IUCISD
(IUCISD (国際社会開発大学連合) から
の公式社状——'86年夏に国際シンポジウ
ムを開催)

多摩ゼロックス
ケンウッド八王子事業所シンガポ
ル人研修生
(個人利用)
神奈川大学助教授 深澤 俊昭
九州大学助教授 矢田 俊文
慶応義塾大学学生 武田 修
安田精工* 小倉 増三
山形県結核成人病予防協会 佐藤 茂喜
ヒューマンライフセンター
日本生産性本部
日本電子計算
日本分光工業
協和コンサルタントグループ
日立製作所システム開発研究所
日本コン下水道本部
サンネット工業
中央大学陶芸研究会
早稲田大学教授
早稲田大学教授
成蹊大学ギターソサエティー文化
科有志
学習院大学教授
中央大学教授
東京女子大学教授
国際基督教大学グループ体験研究
会
学習院大学フランス会部
明治大学教授
中央大学教授
松本英語専門学校同窓生
大東文化大学教授
第24回大学教員懇談会
国際経済商学生協会の*
文部省厚生補導事務研修会
東京Y.W.C.A. 青少年委員会
ルソール合奏団
日本基督教団みくに伝道所
自由民権資料研究会
コニカ**
国際交流サービス協会
ヒューマンライフセンター
日本鋼管
関東共立エコー
中野輸送
新日本商会
協和醸造工業*
日本生産性本部
横河メテカリスシステム
ケンウッド駒ヶ根事業所
京セラ

予 告

●第143回大学共同セミナー

主題 よくわかる家族のはなし
 期日 1988年3月11日～13日(金～日)

◇ゲスト対談

犯罪の家族誌 劇作家 山崎 哲氏
 劇作家 別役 美氏

◇セクション演習

A. 親の自立, 青年の自立

東京大学保健管理センター副所長 山田和夫氏
 立教大学学生相談所カウンセラー 平木典子氏

B. 異文化の親子関係

法政大学経済学部助教授 山本真鳥氏

C. ライフサイクルの変化と家族

お茶の水女子大学家政学部助教授 袖井孝子氏
 (運営委員)

D. 家族史入門——とくに欧米と日本の場合

東京経済大学経済学部助教授 桜井哲夫氏
 (運営委員)

●第144回大学共同セミナー

主題 人工知能は感性を持てるか? (仮題)
 期日 1988年6月17日～19日

◇問い合わせ先=企画室 ☎0426-76-8532

東芝プロセッシングシステム部
 相模マイク
 日本電気
 ケンウッド八王子事業所シンガポール人研修生
 (個人利用)
 オクチ楽器店
 白梅学園短期大学学長
 白金教会
 宮崎医科大学文部事務官
 神戸大学文部事務官
 秋田大学文部事務官
 宮崎大学文部事務官
 ■11月(前グループ、延四二七八)
 東京理科大学教授*
 明治大学教授
 杉野女子大学・同短期大学部自治会
 リーダースキャン
 国際基督教大学グループ体験研究会
 法政大学助教授
 東京外国語大学タイ語劇合宿
 芝浦工業大学教授
 中央大学教授
 駒沢大学教授

帝京大学講師 伊藤 玄三
 淑徳大学社会学科長谷川 杉山
 金子、千徳、米川、田中、許斐、
 下山合同セミ
 東京外国語大学バキスタン演劇セミ
 東京大学助教授
 明星大学助教授
 東京都立大学助教授
 東京都立大学助教授
 中央大学助教授
 東京都立大学助教授
 早稲田大学助教授
 慶応義塾大学助教授
 慶応義塾大学助教授
 一橋大学助教授*
 中央大学講師
 青山学院大学助教授
 東京大学助教授
 東京工業大学 I A E S T E
 中央大学講師
 中央大学助教授
 中央大学講師
 日本大学助教授
 東京理科大学教授
 青山学院大学青山キリスト教学生会

早稲田大学教授
 法政大学教授
 東京都立大学教授
 中央大学助教授
 津田塾大学教授
 東京都立大学助教授
 法政大学近現代史研究会
 法政大学講師
 工學院大学助教授
 芝浦工業大学助教授
 芝浦工業大学助教授
 駒沢大学助教授
 東京純心女子短期大学美術科・音楽科卒業修養会
 大月短期大学教授
 北海道大学ハンドボール部
 国立館大学意匠ゼミナール
 立正大学教授
 日本工業大学硬式野球部
 東京神学大学全学修養会
 国立館大学助教授
 日本女子大学附属高校生活研究

十代田三知男
 松尾 太郎
 鈴木 浩平
 斉藤 叫
 百瀬 宏
 戸張よし子
 松田 良一
 小林 直毅
 吉田 俣郎
 藤澤 好一
 十代田知三
 小林 英夫
 西落合ホリネス学会
 弓町本郷教会
 所沢武蔵野教会
 日本基督教会東京中会青年部
 農業総合研究所
 日本コトバの会
 ヒューマンライフセンター
 京王アートマン
 アイワールド*
 多摩中央信用金庫*
 日本水産
 酒井薬品
 西武百貨店労働組合
 日本分光工業*
 ベスト外国語学校
 山村硝子*
 日本生産性本部
 文化シャッター
 雪印物産
 日野市役所
 日野協力会
 日本電気
 ケンウッド八王子事業所シンガポール人研修生
 (個人利用)
 明治大学大学院生
 東京工業大学教授
 国際交流基金
 日本UPC教団
 佐藤商事
 安田精工

「セミナーハウス」一九八八年一月二五号 発行 財団法人大学セミナーハウス 〒一九二〇三 東京都八王子市下柚木 ☎0426-76-8511 振替口座 東京五七四五九〇番/編集 大学セミナーハウス企画室/編集・発行人 中川秀英/製作 中央公論事業出版

1988年 春 頌

皆様のご来館をお待ち申し上げます。



編集後記

昨年の論壇に一石を投じた「日本問題」の筆者、K・V・ウォルフレン氏をゲストに迎えた第14回国際学生セミナーは、学生たちの大いなる関心を集めました。同氏が心から楽しまれた学生たちとの討論をはじめ、三日間に亘るセミナーの成果の一端を、読者の皆様とお分かちできればと思います。

昨年七月の前田愛先生の急逝によって、ハウスの建築は、その最大の理解者を失いました。本紙創刊月号記念の座談会で、「僕の書いたものでも、大学セミナー・ハウスでヒントを得て、それを後でだんだんふくらませていったのが、結構あるんですよ。文献ならば何々を参照したと書けますが、セミナー・ハウスでアイデアを得たとは書けないので……(愛)」と語られるほど、この空間の中で、先生は自在に知の遊泳を試みられたのでした。渡辺一民立教大学教授に、「前田愛さんと集中合同講義」と題する一文を「寄稿いただき、前田先生との縁を永く記憶にとどめたいと思います。」(能)

表紙の写真 本館の雪景色